

重慶市の農村教育現場を対象とした美術教育に関する試論

—「自然主義」を応用して—

胡 熙

Abstract

The educational philosophy of natural education is one of the most core ideas of the educational philosophy of Jacques Rousseau, an educated artist who was active in France. The beginning of "Emile," an educational novel he wrote, begins with a passage: "When you leave the hands of the author of things, everything is good, but when you are in man's hands, they become worse without exception". For, all causes at birth they are in good condition, but with living in the society they become dead by the evil influence of civilization and the society. Therefore, the word "return to nature" can be said to be a word that symbolizes Rousseau's thought. Moreover, the naturalism education is called the dissipative education because it is an educational thought which tries to support child's mind and body development while denying the compulsory teachings by the parents and teachers being aside, and matching child's developmental stage and individuality.

In this paper, we will study art education in rural areas of Chongqing, China (where I live), clarify the natural environment, humanities, and rural educational environment of Chongqing City, and clarify how children in rural areas of Chongqing live. In addition, I would like to analyze the educational thought of Jacques Rousseau, Vesta Loch, who advocated naturalist education, and the educational practice of Montessori, and lead to a study of the ideal state of art education in rural areas of Chongqing City.

キーワード……農村教育 自然主義 美術教育 地域教育

はじめに

自然教育主義という教育思想は、フランスで活躍した教育家ジャン＝ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712～1778) の教育思想の中で、最も核心的な思想の一つである。彼が書いた教育小説である『エミール』の冒頭は、「万物をつくる者の手をはなれるときすべてはよいものであるが、人間の手にうつるとすべてが悪くなる。」¹⁾という一節から始まる。それは、人間は生まれたときは善良な状態であったが、社会の中で生活するに伴い、文明や社会の影響で悪に染まってしまうという思想である。そのため、「自然に還れ」という言葉は、ルソーの思想を象徴する言葉と言える。また、自然主義教育は、保護者や教師側からの強制的な教えこみを否

定し、子どもの発達段階及び個性に合わせながら、子どもの心身発達を援助しようとする教育思想であるため、「消極教育」とも呼ばれていた。

本論文では、中国重慶市の農村部における美術教育を研究対象として、重慶市の自然環境、人文環境及び農村部の教育環境を明らかにする。特に農村部の子どもたちの生活の様子や学習環境を中心に述べていく。また、自然主義教育を標榜したルソー、ヨハン・ハインリヒ・ペスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi、1746～1827）の教育思想を整理し、マリア・モンテッソーリ（Maria Montessori、1870～1952）の教育実践を分析したうえで、重慶市の農村部における美術教育の在り方の考察につなげていきたい。

1 重慶市の農村の教育環境

本研究の対象である重慶市は、1997年に直轄化されて以来、経済、教育の水準は急速に発展してきたが、重慶市の全人口の55%を占めている農村部の教育水準（教員の学歴、学校の設備、教員の勤務態度など）は重慶都市部の学校に比べ依然低いままである。特に小、中学校の義務教育段階において、重慶都市部と農村部で教育格差が広がっている。

1-1 都市部と農村部の教育格差

現在、重慶市の小学校は8754校、在籍している小学生は252万人、教師数は約11.4万人である。そして、中学校は1087校、中学生は128.8万人、教師数は6.8万人である。小学校の適齢児童の入学率は99.9%であり、中学校の適齢児童の入学率は97.8%である。この約半分が農村部の学校であり、重慶市教育部は農村部の教育発展を施策として掲げてはいるが、重慶都市部と農村部の教育の格差の問題はまだ解決に至っていない。

重慶市の小、中学校の発展に見る都市部と農村部での教育不均衡は、教育予算の不足が主要な原因である。重慶市の政府は経済の発展に重心を置いているため、農村部に投入している経費は低く、2004年、2005年に全市の財政機関が教育に投入した経費は全市GDPの2.89%しか占めていなかった²⁾。この数字は全国平均の4%より低いものである。また、近年では、重慶市教育部は全市の高等教育を強化発展させているため、小、中学校に投入される経費がさらに減少する傾向にある。その上、都市部の学校を優先的に発展させる制度は、農村部の教育発展に非常に不利である。このため、農村部の小、中学校に投入された経費では基本的な学校の経営しかできず、農村部の教育現場の教師の福祉の充実や研修訓練を実施できないこともある。教師の給料も農村部は、都市部より低い。したがって、教師の多くは農村部よりも都市部での勤務を希望する傾向があり、教育格差を広げる要因となっている。

重慶市の農村部では、教育の重要性が十分に認識されていない問題もある。農村部では、一般的に経済の発展が遅れているため、子どもを学校に行かせずに、出稼ぎに行かせる家庭も存在している。また、小、中学校の中途退学率も都市部より高い。

中国の義務教育の年限は 9 年間であるが、重慶市の農村部において、平均的に受けている期間は実質で 7.5 年間である。文盲者は 7.4%、最終学歴が小学校卒業者が 48.3%、中学校が 37.5%、高校が 6.2%である。2006 年から、重慶市の教育部は全市の農村部の小学校、中学校の学費を全て免除することを始めたが、現在、重慶市の農村部では、教育を受ける目的と重要性が認識されていないため、義務教育を受けることに消極的な子どもと保護者も存在している。

1-2 農村部の子どもたちの教育事情

1-2-1 家庭環境

麗麗が分析した「中国 2010 年第六次人口普查資料」によると、農村部の子どもたちの家族構成は、両親二人とも一緒に暮らしていない子どもは、46.74%と農村部の子どもの半数近くを占めている。そのうち、祖父母と一緒に暮らしている子どもは 32.76%、親戚・友人と一緒に暮らしている子どもは 10.7%。子どもだけの一人暮らしは 3.37%である。また、親のいずれかがいて、父が出稼ぎに行っている家庭は、全体の 36.39%、母子家庭 20.33%、祖父母と一緒に暮らしている子どもは 16.06%、母が出稼ぎに行っている家庭は 16.87%、父子家庭は 8.44%、祖父母と父と一緒に暮らしている子どもは 8.43%である³⁾。このように、中国農村部では、家庭環境に基本的な問題を捉えることができる。

しかも、子ども達の祖父母の世代は高年齢層が多く、農耕地の仕事をしながら、家庭を維持している。その上、子どもの面倒までみることは、体力的、時間的にも非常に難しいと考えられる。また、農村部の高齢者たちの多くは義務教育を受けたことがないため、子どもの勉強を指導することが困難である。また、子どもと祖父母とでは年齢による世代の壁が高く、共通の話題が少ない。そのような家庭環境で、子どもたちの孤独感及びフラストレーションも溜まっていると考えられる。

1-2-2 学習環境と健康の問題

中国 2010 年第六回人口普查資料によると、中国全体で義務教育は 99.7%普及している。しかしながら、農村部の学校設備は十分整っているとは言えず、また、多くの農村部の保護者たちには義務教育を受けさせようという意識がまだ形成されていない状態である。農村教育現場ではこのような環境の中で、勉強への興味を失い、成績が低下し、そして中退し、祖父母の農業や家事の手伝いをするか、あるいは未成年にも関わらず都市へ出稼ぎに行くといった子どもたちが多く存在している。

また、農村教育現場では健康上の問題もある。子どもたちの身体的な健康について、保護者及び学校の食品の安全に対する意識が低く、飲食における栄養のバランス、病気の予防などが十分でない。この問題は両親不在の家庭ではさらに深刻である。しっかり食事をしていない状

態で、農業や家事などによる過酷な労働を強いられ、肉体的にも精神的にもダメージを受けている状況がある。加えて、親の愛情を充分に感じることができない子どもの中には、常に孤独感を抱いたり、情緒不安定な状態になるという問題も生じている。

1-2-3 生活環境と子どもの心

農村教育現場では犯罪が多発する問題もかかえている。それは治安の悪さからというよりも、劣悪な生活環境が人間形成に及ぼす影響としての問題と考えられる。筆者の教育現場での経験では、農村部の子どもたちは都市部の子どもたちと比べて、衛生面の意識が低い。また、両親が長時間家に留守にすることが多いため、親と過ごす時間が少なく、コミュニケーション能力が低い子どもが多い。例えば、基本的なあいさつができない。人見知りをする。授業の中で自由な対話や皆の前で発表することを苦手とする。などの傾向がある。また、人間関係の問題をうまく処理することができず、トラブルがあると焦ったり、逃げたり、攻撃的になったりする事態も少なくない。中には、ごみのポイ捨てや、場所を選ばずに唾を吐くなどする子どももあり、そのような社会的規範の欠如は深刻である。

重慶市では、未成年がゲームセンターに入ることを禁止しているが、農村部では管理が不十分で、徹底されていない状態である。そのため、学校の周辺にあるゲームセンターには子どもたちが多く出入りしており、ゲームに熱中したり、タバコを吸ったり、言葉遣いも汚かったりする状態であった。このような環境も、心身の発達に悪い影響を与える要因と考えられる。

農村部の子どもたちは、自己管理能力が乏しく、生活が乱れがちである。筆者が担任したクラスでは靴を履かずに通学している子どももいた。『中小生日常行為規範』⁴⁾に違反している行動も多く見られ、常習性が認められる者さえいる。

一方で、農村の教育現場の環境も非常に劣悪であり、筆者が住んでいた宿舎はトイレやシャワー室、エアコンなどの基本的な設備は全て揃っておらず、トイレは子どもと共用しなければならなかった。学校はパソコンや美術教室、体育館などの基本的な設備も揃っておらず、教室の雰囲気も暗く堅苦しいものであり、教室の中には装飾がほとんどない状態であった。また、子どもたちは絵の具を持っていないため、美術の授業を実践することが難しかった。学校は山に囲まれ、美しい自然風景に恵まれているが、子どもの安全上の問題から、外に出て写生をするような実習はなかった。

さらに、筆者が実習で訪れた A 村においては、年長者ほど性差別意識を強く持っていた。男子は甘やかし、女子には投げやりな態度を取る保護者が多い。このような生活環境が子どもの心身に大変な影響を及ぼしていると考えられる。子どもに暴力をふるったり、暴言を吐いたりすることも、日常茶飯事であった。

2 自然主義に習う理由とその内容

2-1 自然主義教育の基本理念

前章で述べてきたように、重慶市の農村の教育は、子どもに対し、大人の価値観を教化するものとなっている。親も教師も「何かを教える」「詰め込む」ことを優先し、子どもを見守ろうとする意識が不足している。このような農村現場の諸問題を改善するため、筆者は自然主義教育に習う必要があるのではないかと考えている。次に、先行研究を整理しながら、自然主義教育について述べていく。

自然主義教育は、ヨハネス・アモス・コメニウス（Johann Amos Comenius、1592～1670）、ジャン＝ジャック・ルソー、ヨハン・ハインリヒ・ペスタロッチ、フリードリヒ・フレーベル（Friedrich Wilhelm August Fröbel、1782～1852）、ジョン・デューイ（John Dewey、1859～1952）マリア・モンテッソーリらによって展開された。この教育の潮流は「教育は児童の天性に基づいて行われるべき」という考え方に基づいている。

自然という概念について、『大辞林』によると、自然という言葉には三つの意味が含まれている。第一に、「おのずから存在してこの世界を秩序立てているもの。山、川、海やそこに生きる万物。天地間の森羅万象」⁵⁾。第二に、「人や物に本来的に揃わっている性質。天性」⁶⁾。第三に、『哲 nature』古代ギリシアで、他の力によるではなく自らのうちに始源をもち生成変化するものの意」⁷⁾。

本章では、自然主義を標榜したルソー、ペスタロッチ、モンテッソーリの教育理論を整理する。また、中国重慶市の農村部の実態現状を踏まえて、彼らの教育理論が、農村美術教育にどのような積極的な影響を与えるのかを述べていく。

2-2 ルソーの自然主義教育観

自然教育主義という教育主義は、ルソーの教育思想の中で、最も重要な思想の一つである。ルソーは、すべての教育を行う時に、必ず自然及び人間の生まれつきの性格や天性に従って行わなければならないと主張していた。このような自然主義の教育思想の目的は、自由と平等及び民主を追い求める「自然人」⁸⁾を育むことである。ルソーは『エミール』の前言において、すべての人間は生まれたばかりのときには純粋で善良な人間であったが、自分の生きる環境や人間の文明などに汚染されるに伴って社会に不平等な階層が生じるようになったという。不平等な階層が生じることを防止するためには、教育を行う時に必ず「自然法」を遵守しなければならない。またルソーは次のようにも述べている。「人類は万物の秩序のうちにその地位を占めている。子どもは人間生活の秩序のうちにその地位を占めている。人間を人間として考え、子どもを子どもとして考えなければならない。それぞれの者にその地位をあたえ、かれらをそこ密着させて考え、人間の情念を人間の構造にしたがって秩序づけること、これが人間の幸福のためにわたしたちにできることのすべてだ。そのほかのことは外部の原因に依存していて、わ

た私たちの力ではどうすることもできない」。⁹⁾さらに、強制的な教育については、「人間はある土地にほかの土地の産物をつくらせたり、ある木にほかの木の實をならせたりする。風土、環境、季節をごちゃまぜにする。犬、馬、奴隷をかたわにする。すべてのものをひっくりかえし、すべてのものの形を変える。人間はみにくいもの、怪物を好む。なにひとつ自然がつくったままにしておかない。人間そのもののさえそうだ。」¹⁰⁾と厳しく批判した。

また、『エミール』の中で「植物は栽培によってつくられ、人間は教育によってつくられる」¹¹⁾「生まれたときにわたしたちがもってなかったもので、大人になって必要となるものは、すべて教育によってあたえられる。この教育は、自然か人間か事物によってあたえられる。わたしたちの能力と器官の内部的発展は自然の教育である。この発展をいかに利用すべきかを教えるのは人間の教育である。わたしたちを刺激する事物についてわたしたち自身の経験が獲得するのは事物の教育である。」¹²⁾と述べている。要するにルソーは、教育を自然教育、人間の教育、事物の教育の三種類に分けたうえで、自然教育を核心的な部分に位置付けているのである。これに加えて、教育を行う場合には、必ず子どもの心身発展の段階に対応させながら子どもの天性を尊重しなければならないと主張している。

次は、ルソーは子どもたちの発達段階によって四つの教育段階に分けて教育を行うべきだと主張している。この四つの教育段階は、「一、幼児段階（0歳～2歳）、二、児童段階（2歳～12歳）、三、少年段階（13歳～15歳）、四、青年段階（16歳～20歳）」とされる。そして、この四段階にはそれぞれの特徴がある。幼児段階では、子どもたちは自分の思想など全くなく、ただ事物に対しての意識がぼんやりしているだけである。そのため、幼児の教育段階では子どもに体を鍛えさせることを中心とした体育教育を行うべきと言う。児童段階では、子どもの言語力及びコミュニケーション能力が徐々に高くなるが、基本的な判断力及び理性などはまだ乏しく、続けて体育をさせながら感官教育も行わなければならない。少年段階では子どもたちの思考力がほぼ発達するので、この段階では知育教育を行う最も適した時期である。青年段階では、子どもたちの性格は不安定で落ち着かないため、この段階では徳育を行わなければならないと述べている。このように、ルソーは子どもに対しての教育は四つに分けられ、そして、体育教育、感官教育、知育教育、徳育教育は子どもたちの発達段階に従って行われるべきだと主張していた。

ルソーの自然主義を研究した坂入明はルソーの発達論について、子どもは大人ではなく、子ども時代は大人となるための踏み台でもなく、それ自身として独自の価値をもつものであるとする子ども観が存在する¹³⁾と述べている。また、子どもたちの発達段階に対して、子どもはその年齢や時期に応じた、子ども固有の発達やその順序があり、生理的、心理的諸事実にもとづく発達のすじ道に従うべきであることを説いているともいう¹⁴⁾。すなわちルソーの教育思想は、人間の天性を枉げるのではなく社会や人為による悪影響から子どもを保護し、人間性の善なる自然性の芽ばえを見守ることを意味するのである。また、山崎高哉は、ルソーの消極教育は

積極教育と対立しており、子どもの自然の発達段階に即応した教育であり、また、理性の働きを予想するような教育は行わず、感覚の訓練をもって理性に対する準備をなす教育を意味している¹⁵⁾とも述べている。

自然教育の発達論は、中国の農村美術教育にとっても、大いに参考にすべき価値があると考ええる。ルソーの発達論では、子ども、青年、成人の三期が、それぞれ身体を中心とする時期、知的教育を中心とする時期、道徳的教育を中心とする時期とされており、教育内容の重点が異なっている。ルソーは『エミール』の中で、「変わりやすい人間のいとなみを考え、すべてが一世代ごとにひっくりかえてしまう現代の不安動揺を考えると、けっして部屋の外に出る必要のない人間、たえず召使いにとりまかれている人間として子どもを育てること以上に、無分別なやりかたを考えることができるだろうか（中略）大人になったとき、自分の身をまもることを、運命の打撃に耐え、富も貧困も意にかいせず、必要とあればアイスランドの氷のなかでも、マルタ島のやけつく岩のうえでも生活することを学ばせなければならない。」¹⁶⁾と述べている。ルソーはここで子どもの成長にとって様々な経験や、体験がいかに大切かということ伝えようとしているのである。農村の美術教育現場でも、単に子どもたちの安全を守るため、安易な教室の中で制作させるだけではなく、自然により近い農村だからこそ自然と関わりのある授業（例えば、自然メディアを使うこと、植物や動物などに親近感を持たせることなど）を積極的に導入し、子どもたちが自然の多面性や環境の多様性を発見できるような演出が期待されよう。

2-3 ペスタロッチの自然主義教育観

ヨハン・ハインリヒ・ペスタロッチは、18 世紀後半から 19 世紀にかけてスイスで活躍した教育実践家である。彼は自然主義教育理論の探究だけでなく、スイスの農村部において様々な教育実践を行った。1769 年、ペスタロッチは、チューリッヒ郊外のビル村に農場を開き、1775 年には、ここに農民たちの子女のための貧民学校を立ち上げ、直接的に貧困層の子どもを教育した。ペスタロッチはルソーの教育思想を受け継いでおり、人類の発展の本質は自然に従うことで、そのため、教育も必ず自然規則に基づいて行わなければならない¹⁷⁾と主張していた。また、彼もルソーと同様に、自然教育は単に子どもを放任することではないと強調した。彼の著書である『白鳥の歌』によれば、自然に従う教育は子どもを放任することではないという。そして教育がもし子どもを放任すると、彼らの原始的な本能しか呼び起こせない¹⁸⁾としながらペスタロッチは次のように述べる。

「一体どのような教育が正しい教育といえるのか。正しい教育は、まるで園丁の芸術のように、千万という多数の樹木が園丁の世話に恵まれており、成長しているようなものである。園丁は樹木の生長には干渉せず、樹木の成長はもっぱらその樹木自身に依存している。園丁はただ植樹したり、水をやったりをしているだけであり、次の発芽、成果ということには全く干渉

せずに、自然のままに任せるようにしている。園丁の役割は樹木が外部の力に侵害されないように防ぐということであり、単に樹木を見守るだけでも十分である。教育者の役割もこのようなものである。」¹⁹⁾

ペスタロッチは、教育というものを、自由を前提としつつ、子どもたちの自発性を尊重しながら、行わなければならないものと捉えている。そのため、彼は「開発教授」及び「直観教授」という二つの教育理念を提起した。

このように、ペスタロッチは子供の自然成長の法則を非常に重要視しており、人間が自然な方法で能力を伸ばすべきことを主張していた。彼は人間の能力と動物の本能と一緒に扱ってはいけないとしながら、人間の能力を「感情」、「精神」、「手（技術的能力）」の3つに分けた。つまり、すべての子どもたちにこの3つの能力を発達させる必要があり、教育の目的はこの潜在能力を自然に呼び覚ますことだというのである。

2-4 モンテッソーリの教育実践

ここでは、子どもの発達段階に沿いながら、教育を行おうと提唱したモンテッソーリの教育実践を取り上げ、考察を加える。

児童中心主義を標榜したモンテッソーリは、イタリアのローマで医師として精神病院に勤務していた。彼女は、ルソー及びフレーベルの教育思想に影響を受け、教育は、子どもの天性及び発達段階に従わなければならないと主張している。また、彼女は子どもの中の自発性を重んじており、どの子どもにもある知的好奇心が自発的に現れるよう、教員はできるだけ子どもたちに自由な環境及び空間を提供すべきだ²⁰⁾という。また、教育の根本原理が子どもの自由にあると考え、教師の役割を子どもの自発的な発達を援助することと、そのための環境を整備することにあると捉えた。彼女は 1907 年に貧困層の健常者の子どもたちを対象とした「子どもの家」という保育機関を設立した。「子どもの家」は、生活環境が極めて劣悪であったサン・ロレンツォ地区に設置されており、貧困な子どもたちを教育対象とした。サン・ロレンツォ地区に対し、『モンテッソーリ教育法と其応用』の中で「羅馬市外なるサン・ロレンゾは、毎日新聞紙上に多くの悲惨なる記事を提供するので有名である。一體此の地は一般人民の住む所ではなくて、所謂貧民窟である。極めて僅少の賃金を得る下等労働者、若くは無職浮浪の徒の住む所であって、羅馬の如く工業不振の地に在りては、得て免れ難き現象である。或いは又、出獄後監視の期間に在るものなどの蠢々と群居して居る魔窟である」。²¹⁾と述べている。

モンテッソーリは、子どもの発達において 3～7 歳の年齢層は敏感な時期であると言い、実際生活の中で経験的に実践することによって、身体発達、感覚教育、知的教育を目指していた。教師の役割は、教育環境において単に保護者の立場にすぎず。教師は、子どもの自由、構想、想像などを妨げないように留意しながら子どもたちの心身の発達を保護しなければならない。

モンテッソーリによれば、幼年期は人間の敏感期であり、まさに学習に最適な段階である。

この段階に得た経験は、他の時期より忘れにくい。彼女は、幼年期の子どもたちに十分な活動ができる空間、自主性を与え、子どもの天性を開放しなければならないと言う。また、モンテッソーリは、子どもたちの自発性を重視しており、「自己教育」という教育理念を主張した。つまり、教員は知識を子どもたちに押し付けるのではなく、子どもたちの勉強への興味を呼び起こし、自主的に勉強させるように工夫しなければならないと言うのである。しかしながら、中国農村部の小学校では、ほぼ教科書に従って、子どもたちに臨画させたりする美術教育を行うため、子どもたちに自由な空間や自主性を与える機会が少ない。農村部の教育現場においても、子どもたちに自分でテーマを設定させ、自分で作品を作らせることが、美術への興味を持たせるために必要である。

3 中国の先行研究から

ここで、自然主義教育の考え方に近い立場から美術教育研究を推進している 2 つ先行研究を参照する。両者の研究は、農村の子どもたちの日常生活の現状を踏まえており、中国農村美術教育の発展を目指す上で参照すべきものである。本節では、それらを参照しながら農村における美術教育の在り方を考察していきたい。

3-1 陳艷彬「青岡農村小学農村美術」²²⁾という研究について

陳艷彬は、2010 年中国特殊支援教師の試験に合格し、中国黒竜江省青岡農村小学校の教師になった。彼はこの青岡農村小学校の農村美術教育の現状を踏まえて、黒竜江省における農村美術教育の在り方を研究した。この研究は、黒竜江省青岡農村小学校の美術教育現場の問題点を分析し、農村部の子どもたちに対する有効な美術教育方法を見つけることを目的としている。

陳艷彬によれば、農村における美術教育現場の問題は都市が発展する過程において克服すべきものであり、無視できない社会問題である。また、陳は、美術は豊かな人間性を体現する教科なので、農村美術教育が心身発達を正しく導くための媒介として活かせると考えている。陳の研究は、美術創作、共同制作、美術活動、そして多元化についての評価の四つの視点から、農村の子どもたちの心の内側の問題について探求しており。美術教育を通して、農村美術教育の心身調整能力、自立力、自信を育むことが大事だと主張している。

具体的には、農村部における美術教育を実施する際に、教師は常に子どもに模範を示すべきことや、絵を描くことをきっかけとして子どもたちと交流し、子どもの作品や絵を描く様子を観察して、子どもの心の内側を分析すべきとも述べている。陳の提言はルソーやペスタロッチ、モンテッソーリの教育観と通じるものがあると同時に、他者との交流を通して個と全体を生かそうとする進歩的な側面を持ち合わせている。

3-2 張亜苹「農村の子どもに対する美術教育の作用」²³⁾という研究について

張亜苹は、美術が子どもたちに及ぼす作用を検討することで、農村部の教育における美術教育の実施方法について述べている。ここで張の論文「農村の子どもに対する美術教育の作用」について概要を述べていく。論文は8章からなり、1章では論文の研究の背景と意義、研究の目的と方法、国内外の文献を、そして、2章では農村部の子どもたちの成長環境と現状についてまとめている。3章では農村部の教育現場の現状及び農村美術教育、子どもの家庭、そして教師の三つの側面において農村の子どもたちに教育上の問題が生じる原因をまとめている。4章では農村部の小学校の素質教育における美術教育の重要性について、素質教育の内容の充実、学校のカリキュラム体系の完備、児童の心的問題の解決という三つの側面から述べている。5章では子どもに対する美術教育の積極的な作用を中心に、農村部の子どもたちの性格の改善、子どもの積極性の向上、多元的な評価による子どもの自信の向上、交流を通じた農村美術教育による子どもの価値観の矯正という四つの視点から論述しており、それらの要点は全て農村部の子どもたちの現状を踏まえて述べられている。6章では親が不在という特殊な成育環境における、特別な教育について述べている。農村における美術の現状を踏まえ、楽しく教育の環境を作ることを通じて、子どもに美術への興味を持たせるような教育場面を設けることが主張されている。7章では農村部の子どもに対する教育の提案の普及方法について述べている。8章では農村部の学校における美術教育の実例について紹介している。

張亜苹は、美術は他の教科と比べて心が安らぐ時間であるので、温かい美術教育の環境を作ることで、子どもたちの孤独感を解消することができると考えている。温かい教育の雰囲気は美術教育に有効なだけでなく、他の教科の教育にも役に立ち、子どもの心身の発達に有効だという。また、農村部の教育現場では毎週の美術の授業回数が少ないが、この問題に対して張は、他の教科と関連させながら総合的にカリキュラムに取り組むべきだと述べている。

張は、中国の素質教育を教育の目標としており、農村教育現場の教師に農村部の美術教育の問題点を指摘し、農村部の子どもの心身の発達に対して美術教育が持つ作用を現場の教師に認識させるべきだとしている。また、農村における美術教育を通してこそ、良好な性格、自己管理能力、自信、正しい価値観を育むことができる²⁴⁾とも主張している。

張の提言で注目すべきは、農村部の子どもたちには孤独感が強いという問題、自己管理能力が乏しいという問題、劣等感が強いという問題など、心の問題が存在しているということである。特に、子どもの心の問題は両親に大切にされていないことが起因しており、美術教育においては、両親からの愛情を補足し、心を満たすような美術活動が必要だと主張している。

このように自然主義の美術教育の在り方を研究した先行研究は、中国における農村美術教育が直面する深刻な問題に対して大きな可能性を示している。

おわりに

児童の天性（善）を覚醒させるためには、彼らの心身にとって良好な教育環境が必要である。

いわゆる人類や文明社会などに汚染されていない自然な環境にいる方が、より人間本来の天性が呼び覚まされるということである。幼稚園の創始者フレーベルは、世界最初の幼稚園を創建したときに、「kindergarten」という名称を付けた²⁵⁾。「幼児の花園」という意味である。一体どのような教育環境が子どもの成長に求められるのだろうか。ヨハン・ホイジンガ(Johan Huizinga、1872～1945)は『遊ぶ人(Homo ludens)』という著作の中で、「学校という言葉の最初の意味はのんびり暇を過ごすという意味であったが、人類が発展するとともに、子どもたちの天性及び若者の時間などは様々な人類文明に縛られるようになってしまう。現代では学校という言葉の意味は系統的あるいは技能訓練という意味になってしまった」²⁶⁾と述べた。美術の授業中に、技法や技能などを訓練させるより、子どもが自然と接する方が重要だと主張しているのである。

現代の私たちは、美術教育において単に子どもたちに何か技能を訓練させるだけではなく、学校の本来の意味(例えば、学校にいて快適だと感じる気持ちとか、所属感、安心感など)を回復させなければならない。そのためには、学校と自然のかかわり、および子どもと自然のかかわりを大切にすべきなのである。

ルソーの自然主義教育の唯一の目的は自然人を育むことである。自然人とは、何もしない、すべての教育を受けない、あるいは現代社会文明と離れている原始人であるということではなく、純粹で、社会の悪、汚さに汚染されていない状態の人間であることを意味する。美しい自然に恵まれている中国の農村部でこそ、教員たちは、自然人を育むという意識を持つべきであろう。

<注>

- 1) ルソー著 今野一雄訳 『エミール(上)』 岩波書店、2007、p.27.
- 2) 胡熙「中国重慶市の農村における美術教育の方法に関する考察-留守儿童問題を背景に-」上越教育大学教科・領域教育専攻 芸術系教育実践コース(美術)大学院修士課程学位論文、2019、p.17.
- 3) 麗麗「中国における留守児童の暮らしの現状と支援の課題-子どもの権利の視点から-」『東洋大学大学院紀要』52 卷、2015、p.293.
- 4) 「中小生日常行為規範」とは、中、小学生の思考道徳及び日常行為に対する基本的な要求である。
- 5) 松村明『大辞林』三省堂、1989、p.1059. .
- 6) 同上 p.1059.
- 7) 同上 p.1059.
- 8) ルソーは『エミール』で、自然教育の究極の訓練目標は「自然人」であると述べた。彼の議論によれば、「自然人」の概念は「市民」と「国民」の概念に対立している。ルソーによれば、自然国家と独裁体制の対立から、「自然人」の育成と市民の育成は相反する目的であり、この 2 つを同時に教育することは不可能である。
- 9) 前掲注 1、p.133.
- 10) 前掲注 1、p.27.
- 11) 前掲注 1、p.28.
- 12) 前掲注 1、p.29.
- 13) 坂入明「ルソーにおける「子どもの発見」の意味について」『東京家政大学研究紀要』第 29 集、1989、pp.1-5.
- 14) 同上 p.4.
- 15) 山崎高哉「ルソーの「消極教育」に関する一考察」『佛教大学教育学部学会紀要』第 3 号、2004、p.12.

- 16) 前掲注 1、pp.39-40.
- 17) 焦荣华 「兒童的自然教育之路」南京師範大学博士学位論文、教育科学院、教育学、2016、p.34.
- 18) 同上 p.34.
- 19) 裴斯泰洛齐著、夏之莲編訳『裴斯泰洛齐教育論著選』北京人民教育出版社、2001、p.336.
- 20) 鈴木和正「教育に関する歴史及び思想—20 世紀の教育と新教育運動—」『常葉大学教育学部紀要』38、2017、p.63.
- 21) 河野清丸 『モンテッソーリ教育法と其応用』同文館、1914、p.17.
- 22) 陳艷彬「青岡農村小学留守兒童的課堂美術教育」哈爾濱師範大学硕士学位论文、学科教学（美術）2017、pp.5-24.
- 23) 張亜苹「論美術教育在農村留守兒童健康成長過程中的導向作用」河北師範大学硕士学位论文、学科教学（美術）2017、pp.2-18.
- 24) 同上 p.7.
- 25) 前掲注 17、p.36 を参照した。
- 26) 约翰・赫伊津哈著、多人訳『游戏的人』中国美术学院出版社、1996、p.165.

主指導教員（柳沼宏寿教授）、副指導教員（佐藤哲夫教授・田中咲子准教授）